

『恋は秘めたる情慾に -旧制高校モラトリアム-』

著：高月紅葉

ill：北沢きょう

「おかえりなさい。光太郎さん」

まるで怒っているような冷たい声が行彦の口から出た。光太郎の眉はわずかに動く。

「ただいま……。こっそり抜けたことを怒っているんじゃないな」

出かけたときと変わらず、光太郎の学生服に乱れはない。瞬時に確認してしまう行彦は、まっすぐに相手を見据えた。光太郎は平然とした表情だ。

行彦の言わんとしていることなど、百も承知だろう。それなのに、まだ、悪所へ通う。もはや嫌がらせかも知れないと思わずにいられない。

「少し、歩こう」

誘われて行彦は従った。ぶらぶらと歩いたが、夕食の時間が近いこともあり、すれ違う学生たちは皆、寮へ戻っていく。

行彦は一步遅れて歩きながら、詰め襟の学生服を着崩さない光太郎を眺めた。目深にかぶった白いライン入りの学生帽も凜々しく、非の打ち所がない『学生さん』そのものだ。

卒業後は帝国大学へ進学して、末は博士か大臣か。エリート養成コースに乗っている学生たちは、国家を担う次世代の若人として市民に広く愛されている。

光太郎の場合は、牧野家の稼業を継ぎ、いっそう盛り立てていくだろう。生まれながらのエリートコースだ。

「緒方が言った『誤解』って？ どうせ、小さな話を大きくしているだけだ。あんまり、真に受けなくてくれ」

横に並んだ光太郎に問われたが、行彦は答えられなかった。

横顔に光太郎の視線を感じ、胃の奥がぎゅっと掴まれたような心地がして、火照りが全身に広がっていく。

しらばっくれたことを言う光太郎のせいだ。そう思い、ちらりと視線を投げた。

「限度があると、お話ししたことを、覚えておられますか」

「またそんな言い方をする……。学内では友人だろう。おまえのほう年上なんだから、もっとぞんざいに」

「その話は、別の機会でお願いします」

目を細めて見据え、光太郎を黙らせた。校庭の脇で足を止めて向かい合う。

「相手と手を切るのが難しいのなら、私が代わりに話をつけて参ります。どこの店の、何という女性ですか」

行彦は真剣な顔で切り出した。指が腕ごと震えそうになり、拳を握りしめる。

「あなたが通っている……遊里の女性です。噂が立ってからでは取り返しがつきません。あなたは婚約したんですよ」

「行彦。おまえは誤解している。……ああ、さっきの緒方は、そういうことか」

合点がいったと言わんばかりにうなずき、さっぱりと刈り上げた自分の首の裏へ手を回した。しばらく黙ってから、ため息をつく。

「婚約はしていない。顔合わせをしたけど、紹介を受けた程度で会話もしていないんだから。嘘だと思えば、お祖父さまに聞いてごらんよ」

「その必要はありません。二人で一緒にお話を聞いたではありませんか。じきに嫁を迎えるのですから、身辺はきれいにしておかなければなりません」

「ちょっと、待ってくれ。いまの話、聞いていたんだらうな」

「どういうことですか」

「婚約はしていない、って説明したばかりじゃないか。二人で聞いた話だって、いつかは結婚するだらうって、その程度の話で……」

「しています」

行彦が繰り返すと、光太郎は大きく息を吸い込んだ。

こめかみの血管が神経質に動き、凜々しい眉がわずかに引き上がる。大人びて見えても、あと一步の間かん気が幅を利かせ、瑞々しい不完全の妙が、行彦の心をざわめかせた。

「親同士が合意しているのですから、婚約が成立したも同然です」

「同然……？ 違うよ。約束をしていないんだから、婚約もしていないんだ。それこそ、勝手なことを言って相手に失礼じゃないか」

声を荒げた光太郎が行彦を置いて歩きだす。話は終わっていないと伸ばした指先が、制服の袖をかすめて宙に浮いた。

「光太郎さん。待ってください。……光太郎さんっ！」

「もういいだろう。どうせ、話にならないんだ。行彦は、俺の言うことなんて、右から左に聞き流してしまうんだからな」

いつになく苛立った声を出し、光太郎はいっそう大股の早足になる。洋装の歩幅は広い。

袴を足にまとわりつかせた行彦は、小走りになって追った。

「……どうして、そんな」

心外だ。いつだって、だれよりも心配しているのに。

そう言いたいのだが、言葉にならない。口を開けば小言ばかりを繰り返してきた。立場の違う二人の言葉はすれ違うことも多い。

それでも、行彦にとって光太郎のそばにいることは特別な時間だ。いまだけの、学生でいられる間の、夢のような時間だ。だからこそ『花が咲いた』だの『山がよく見える』だの、当たり障りのない話を持ち寄り、じゃあ見に行こうとなるのが楽しみだった。

対等な友人でいたいのだ。そして、光太郎には特別だと思われたい。

「私は、あなたのために……っ」

校舎の裏に至り、ようやく追いついた。空は暮れて青紫がかっている。防風の雑木林が風に吹

かれ、不穏なほどのざわめきが響いていた。

「おまえが仕えているのは、お祖父さまだ。そうだろう」

急に振り向いた光太郎の手が、行彦の肩を掴んだ。

「それなら、それでいいんだ。俺のためなんて、おためごかしはいらない。どうせ、おまえは本音なんて口にしないんだからな」

声が近くに聞こえ、行彦は驚いた。

あとずさろうとした足が動かず、身をすくめることも忘れてしまう。

「年下の俺の気持ちなんて、わかりはしないだろう……」

光太郎の声が、行彦のくちびるに触れる。肩越しの夕映えは、木々の枝が複雑な文様を描き、まるで色付き硝子を切り貼りしたように見えた。

「何を、したんですか」

ほんの一瞬の出来事だ。息を止めていたくちびるの上に、ぬるい風が走っていく。

行彦の視界を奪った光太郎が身を引く。肩は掴まれたままだった。

「知らないのか、行彦。これがキスだ。独逸語なら『ベーゼ』」

悪ふざけをごまかそうとする声は低くかすれ、何ひとつ冗談になっていない。

「……もっとましなやり方はないんですか。黙らせるにしたって、こんな……」

やっとあとずさることができた行彦は、光太郎の腕を振り払い、自分の着物の袂を掴んだ。くちびるを拭おうとしたが、素早く伸びてきた手に阻まれる。

「な、にを……」

今度こそ抵抗する。腕を払いのけ、光太郎の肩を両手で押しやった。揉み合いになりながら、行彦は混乱する。いったい、何が起こっているのか。まるで嵐に飲まれているかのように理解が追いつかない。

気がついたときには光太郎に腕を掴まれていた。木立の中へ連れ込まれる。

「光太郎さんっ！」

「一度も二度も同じだ」

いまいましてに言った光太郎の両手が、行彦の頬を掴む。逃げようとした背中が木の幹にぶつかり、あっけなく二度目のくちづけが奪われた。

「……んんっ」

かぶりつくような乱暴さでくちびるが吸われ、行彦は腕を振り上げる。光太郎の学生帽が薄闇に飛んだ。

頬ひとつ殴れず、握りしめた拳は頭上に縫い留められる。興奮した光太郎は、もう片方の手で行彦の顎先を掴んだ。痛いほど力強い。

「ん……、んっ」

押し当てられたくちびるの熱さに目を見張り、行彦は貪られるままに息を乱した。行き場をなくした片手が光太郎の学生服の身頃を掴む。

行彦の胸は激しく波打ち、息が喉に詰まって不快な気分を襲われる。

怒りにぶるっと震え、光太郎を睨みつけた。その瞬間、刻が止まる。

「……っ」

行彦は虚を衝かれた。

感情に任せて蛮行に走っているはずの光太郎が、まぶたを閉じている。何度か見た寝顔とはまるで違い、表情は美しく艶かしい。

ますます混乱した行彦は浅く息を吸い込んで腰を引く。遠慮がちに舌先が這い、いよいよ口の中を蹂躪されるのかと怯えた。しかし、舌先は侵入してこない。

「……なあ、行彦。傷つけるつもりも、奪うつもりもないんだ」

くちびるを押しついたり離したりしながら、光太郎はつぶやき続ける。

「でも、硬派を気取っても、仕方がないだろう……。こうするしか、ないんだから。他には、どうしたって……」

つぶやく声の低さに、光太郎が見知らぬ男のように思えた。戸惑った行彦の膝の間へと足がねじ込まれ、そして、行彦の股間へと押し当たった。

「あっ……ッ！」

ごりっとした感触を思い知らされ、自分がかちづけによって反応したことを悟る。認めてしまえば止められず、全身が熱く火照り始めた。

光太郎が身を寄せたままで顔を覗き込んでくる。あたりは暗いが相手の顔は見えた。

「もっと淡白だと思っていた。……処理する方法ぐらい知ってる？」

「こ……う……たろ……さん……」

顔を逃がしながら、離れて欲しいと頼んだ声は小さくかすれた。短いくちづけに息づかいが吸い取られる。

「俺の責任でいい。俺のせいにしてくれ……」

「何を、言って……。もう……」

行彦が二人の間に腕を入れると、光太郎は息を飲んだ。いきなり抱きすくめられ、押しのけようとしていた動きが封じ込まれる。

「どうせだから手伝うよ。火をつけたのは、俺だ……」

勝手なことを言う光太郎に肩を掴まれ、行彦の身体が反転した。

木の幹に顔をぶつけそうになり、かわそうとした胸が背後から抱かれる。引き寄せられ、ぎゅっと強く腕が巻きついた。

「危ない。気をつけて」

耳元に流れ込む声は、いつもの光太郎だ。安堵と同時に、隠しようのない欲情を覚え、行彦は膝から崩れ落ちそうになる。

身体が思い通りにならず、逃げることもさえない。試みても無駄だった。何度も繰り返されたくちづけがよみがえり、すべてが光太郎の熱へと傾いていく。

「……あ、はっ……」

光太郎の息が首筋に触れ、行彦は無自覚に喘いだ。

ひとつの部屋に暮らしながら、淡く妄想したことが現実になっている。夢のようでありながら、鮮烈にすさまじい欲求を感じ、めまいがした。

深い友情の果てに互いの欲望が交換されたのなら、どんな心地がするだろうかと考えたことがある。それが性欲であることを否定しても、光太郎が、婚約者となる少女と引き合わされる前から、行彦は見たこともない女たちに嫉妬してきた。それは花街の女に始まり、カフェーの女給、飯屋の少女。果ては決まってもいない未来の伴侶にさえ気を揉んだ。

自分以外のだれかが光太郎に触れる。そのことに、激しい怒りを覚えた。

「いやだ……」

小さな呻きがようやくこぼれ出て、行彦は拒むために首を振る。

「女を抱いた手で……」

触れないで欲しい。

「抱いていない。今日は行かなかった」

欲情をこらえた焦り声で訴えかけられても、行彦は身を硬くするばかりだ。

「嘘だ……。あなたは、嘘を……」

「……本当だよ。信じないだろうけど」

光太郎の声が寂しげに沈み、耳元が吐息にくすぐられる。

「俺が、何のために、あんな場所へ行くのか……。知ってる？ 行彦。なあ、知ってるのか」

片手が袴の脇から差し込まれ、着物の裾を乱される。

「あっ……」

その瞬間、行彦はすべての枷を手放した。牧野の家のことも、牧野の祖父のことも、自分が信じた高尚な愛のことも忘れてしまう。

光太郎を拒むことなどできるはずもない。

股間を探られ、行彦は震えながら木の幹に両手をついた。

「行彦……」

小さな声で呼びかけられ、その声が震えていることに気づく。

行彦の脳裏にいくつもの場面が思い出された。あやふやな記憶の断片だ。

二人の視線は、いつもさりげなくぶつかり、そのまま、はずせなくなるがあった。

早く目覚めすぎた朝や、遠くに相手を見つけたとき、そして夕暮れの薄闇で会話が途切れた瞬間。そこにあるものを友情だと行彦は信じた。相手の立場を理解し、心の内を慮って支え合いたいと願う、深い友情が二人を繋いでいると、高尚な愛の姿に重ね合わせてきた。

そうであれば許される。そう思ったからだ。光太郎を愛しいと思う心に枷をつけて、監視人として振る舞う努力をした。

光太郎の瞳に溢れる感情さえ、疎いふりで見逃してきたのだ。

「ん……」

肉厚なくちびるが、うなじをたどって行彦の耳朶へ行き着いた。軽く歯を立てられ、身体がぶるっと震える。

「ここ……。いい……？」

緩くつけた越中の端から指が忍び込んだ。

「いや、だ……。いや……」

行彦は子どものように繰り返して首を振った。妄想の中では年上らしくできても、実際の快感に晒されては戸惑いが先に立つ。光太郎の指は止まらず、布地を押し上げた象徴を探してうごめいた。その指はしっとりと汗を帯びて熱く、行彦を激しく惑わす。

先端をこねられ、根元を掴まれる。一度、二度としごかれただけで、行彦は腰くだけとなった。木の幹にすがりつき、羞恥よりも勝る快樂を貪って目を閉じた。

罪悪感さえも押し流されていく。

「あ、あっ……」

「ずいぶんと、弱い。まったくしてなかった……？」

ゆるやかに手筒が動き、行彦の息づかいは細くなる。

「ああ、加減が難しい……」

戸惑うように言った光太郎は、抱きつくようにぴったりと寄り添い、まるで自分のものを愛撫するように手を動かし始める。的確で卑猥な動きだ。

「離して……、離してください……」

「だめだ。離せば逃げるだろう。……逃がしたくない。顔は、見ないから……」

「……そ、んな」

「着物が汚れると困る？」

見当違いのことを言いだし、光太郎が片手で袴の裾をたくし上げる。強引な仕草だ。片足が剥き出しになり、勃起したものが外気に触れた。

それさえ快感の火種だ。行彦は自分の口元を片手で押さえた。

いっそ萎えてしまえばいいのに、猛りはさらに伸び上がる。欲が極まり、解放の瞬間を待ちわびた。腰がわずかに揺れ、恥ずかしくていたたまれない。

「……ふ、……んっ」

行彦はくちびるを噛んだ。腰の裏に光太郎の体温がぴったりと貼りつき、布地越しにも熱さを感じる。それが暖かく自分を包み、秋風から守っているように思えた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>